# 美術フォーラム21

Bijutsu Forum 21 / 2025

特集

## 交友の美術史

vol.52

資料紹介

「資料体」としての和作旧居……和作研究会（小野環／永井明生／国近有佑子／尼﨑こころ）4

現代作家論

漆と胎（たい）――装いの造形……上田祥悟 9

# 特集 交友の美術史……深谷訓子編集 14

1. デューラーとラファエッロの友情――作品交換に見る芸術的影響関係の再考……佐藤直樹 16
2. ティツィアーノとアレティーノ――キリスト教絵画と文学における交差……大熊夏実 22
3. 十七世紀イタリアにおける友情に基づく共同制作――ドメニキーノとヴィオラの《原罪のある地上の楽園》……倉持充希 28
4. レンブラントとリーフェンスの芸術的対話……深谷訓子 34
5. 思友の山水――中国の文人画から江戸時代の南画まで……吉田恵理 40
6. 交友の風景、共有される視線――グラネとアングルのローマ……阿部成樹 46
7. 未完の憧憬――ドイツ・ロマン派美術にみる「友愛」のかたち……尾関　幸 52
8. やまと絵師・岡田為恭による交流の表現――「石雲清事」に注目して……宮崎もも 58
9. 彫刻をめぐる批評的実践――戦時下における辻晋堂と堀内正和の連帯……菊川亜騎 64
10. 書が結んだ友情――森田子龍とアスカ・ヨーンをめぐる交流
……ゴンヒル・ボーウグレーン／翻訳：Art Translators Collective（上竹真菜美、春川ゆうき）70
11. 「美術史」のために――中村彝（つね）追悼事業の意義と背景……吉田衣里 76

# 目次

Bijutsu Forum 21
Vol.52 Contents


**書評**

加須屋明子編『芸術と社会　表現の自由と倫理の相克』、高階絵里加・竹内幸絵編『芸術と社会　近代における創造活動の諸相』……田中正之　82

**表紙解説**

表　ヤン・ブリューゲル(父)およびペーテル・パウル・ルーベンス《花環の聖母子》一六一六～一八年……中田明日佳　86

裏　小島徳朗《も／く／く／も》二〇二四～二五年……岩城見一　88

執筆者紹介……90

英文要旨……キャロル・モーランド訳　93

# 特集　交友の美術史

深谷訓子

交友の美術史、簡単に言ってしまえば「芸術家の友情」が、本号のテーマである。筆者がこのことに関心を抱いたきっかけは幾つかあるが、芸術系の大学に勤務しているという環境も関係している。実技の学生たちと接するうちに、作家を志して制作を継続できる学生が、不思議と（特定の学年や環境に）固まって輩出される傾向があるように感じはじめたのである。作家の交友関係と、制作の継続や進展との間には、何らかの関連があるようにも思われるが、果たしてどうなのだろうか。

こんなことを漠然と考えていたときに強く訴えかけてきたのが、若き日のリーフェンスがレンブラントを描いた肖像画（アムステルダム国立美術館寄託）だった。この肖像画が描き出す、信頼と友情に満ちたレンブラントの眼差しは、リーフェンスもまた同様の表情で彼の視線を受けとめたことを想像させるものだ。「真の友人を見つめる者は、いわば自分の似姿を見つめることになるからだ。それ故、友人は、その場にいなくても現前し、[…]これは更に曰く言いがたいことだが、死んでも生きているのだ」[1]。キケローは『友情について』で、親友の小スキピオを亡くしたラエリウスにこう言わしめるが、リーフェンスは友人の画家に、希望と野心に満ちた「自分の似姿」を見出したに違いない。ちなみに本作制作当時の二人は、今ならばちょうど大学を卒業するくらいの年頃であった。私にとってこの肖像画は、先の漠然とした疑問に、理屈ではない答えをくれるもののように思われた。しかし美術史学の立場からは、より実証的かつ批判的にこの問題を扱う必要があることは言うまでもない。

芸術家の人間関係や交流は、これまでの美術史研究でも繰り返し扱われてきた論点のひとつであり、作家の交友関係への着目自体は目新しいものではない。志を近しくする作家たちがグループや会派などを結成することも多く、そうした活動も当然研究対象となってきた。一方で、（とくに近代より前の美術では）そうした交流関係への注目は、最終的には、実利的側面（その関係がどのような機会をもたらしたか）や、具体的な制作における競争的側面（アエムラティオという落とし込みやすいラテン語の概念があることも大きいだろう）を論じる方向に収束することが度々であり、より曖昧で、しかしことによるとより長期的な心理的作用に繋がりうる具体的な友情のありようについては、踏み込まれることが稀であるように思われる。[2]さらに、芸術家の交友というテーマを軸に、幅広い時代・地域の事例研究を集めた論集ということになると、思い当る例は少ない。筆者の専門に近いところでは、『ネーデルラント美術史年報』の二〇二〇年の特集号が「友愛の技（Ars Amicitia）」をテーマとしたが、やはりその特性上、トピックは近世のネーデルラントに集中している。そこで本号では、芸術家の友情について、できるだけグループや会派ということではなく、個人に立脚した形で考察する論考を様々な時代や地域から集めることを試みた。

十一篇の論考は、おおむね中心的な考察対象の時代順に並べている。まずは掲載順に、ごく簡単にトピックを紹介しておこう。

佐藤の論考は、直接会うことはなかったデューラーとラファエロの間で交わされた作品の交換――作家同士の交友において頻繁に行われる象徴的な行為――を出発点に、デューラー作品にみられるラファエロ的な要素を具体的に分析するという新たな視点をもたらすものである。続いて大熊は、ティツィアーノと文筆家アレティーノの関係を繙き、画家を支えたアレティーノの役割のみならず、思想的な共鳴の可能性を示唆する。倉持の論考は、ドメニキーノとヴィオラによる共同制作を取り上げ、さらに制作経緯や伝記などから彼らの関係性を深掘りする。深谷の論考では、先述のようなリーフェンスとレンブラントの関係性に着目し、レンブラントがリーフェンス作品を「リタッチ」するという行為の解釈を試みた。これらが、西洋近世の事例研究である。

続く吉田恵理の論文は、中国元時代の趙孟頫から十八世紀の江戸の文人画まで広範な時代を扱っているが、なかでも重要な視座を提供する木村蒹葭堂ら

の活動期に合わせて、論考をこの位置に配した。ここでは、同志の友を前提として成り立つ「思友」の山水という伝統が紹介され、日本におけるその継承について論じられる。

西洋近代からは二篇。阿部の論考は、ともにダヴィッド門下で、パリとローマで共に過ごした経験をもつアングルとグラネを取り上げる。両者の芸術的志向性は必ずしも一致しないが、おそらくは友人としての共有経験を通じて、作品には一定の関心の共鳴が見出されることが詳らかにされる。尾関の論考は、美術史の中でもとりわけ「友愛」を重要なテーマとして掲げたドイツ・ロマン派から複数の事例を取り上げ、そうした理想の共有の上で、とくにオーヴァーベックとプフォルの友情が《イタリアとゲルマニア》に如何に表象されたかを説く。

宮崎は、幕末のやまと絵師岡田為恭と天台僧願海の関係に光を当て、彼らに共通する関心として尊勝陀羅尼信仰と古典学習、古画古器愛好という共通項を指摘する。為恭はさらに、高山寺を去る願海に自分たちの交流を題材とした作品《石雲清事》を贈っており、パトロン(受容者)と画家の友情の具体例として興味深い。

最後の三篇は二十世紀の事例を扱う。菊川は、抽象彫刻の導入に重要な役割を果たした辻晋堂と堀内正和の戦時下の交友を詳らかにし、読書会等の知的営為の重要性を指摘するとともに、彼らの制作活動におけるその意義を明確にしている。一方、ボーウグレーンは、ともに抽象芸術と書に関心を寄せたデンマークの芸術家アスカ・ヨーンと森田子龍の書簡を通じた交流の展開を明らかにし、洋の東西を問わず、「世界文化」を志向した彼らの活動と関心の共鳴について論じる。

特集を締め括る吉田衣里の論考は、三七歳という若さで世を去った中村彝の追悼事業に着目し、その時代背景と、彼の名を美術史に残すことに繋がったその意義を論じたものである。この吉田の論考は、優れた作家の作品を後世に残すことが場合によってはより困難になった現在――このこと自体は、おそらく、作家活動の多様化や美術館のキャパシティ、コレクターとの関係など複合的な理由によるだろう――、さらにはこれからの「美術史」記述や作品の継承を考える上でも示唆に富む。またこれは、先に引いたキケローの言葉が示唆する、死後もなお続く友情の一例でもあろう。

本特集では、本誌で通常設定している目次のカテゴリー分類は行わなかった。それは、区分によって、論考間に存在する潜在的でかつ多重の響きあいを妨げかねないと感じたためである。例えば、地理的な隔たりと友情という切り口で、実際に会ってはいないデューラーとラファエロ、日本にも隠逸に憧れ詩文書画を友とする同志がいることを伝える作品を描いた木村蒹葭堂、アレシンスキーの仲介を得てやり取りした森田とヨーンなどの事例を読み比べうる(特集1、5、10)。また、文人山水画の理想、ドイツ・ロマン主義が信奉した近代的友愛観、為恭と願海の尊勝陀羅尼信仰、辻と堀内の比較美術史や美術教育への関心、森田とヨーンの「世界文化」志向など、制作の基盤となる次元で作用した思想的背景との関連から、幾つかの論考を相互参照的に読むことも可能だろう(特集2、5、7、8、9、10など)。一方で、より直接的に作品や制作と関連する論考もあるが(特集1、3、4、6)、そのなかで実際に扱われている事象も、モチーフやその捉え方などにおける関心の共鳴、作品交換、共同制作(これについては、中田による表紙作品解説も参照されたい)など幅広い。

最後に、本特集で「交友の美術史」をテーマとした理由をもうひとつ挙げておきたい。それは、ウクライナやパレスチナの戦禍など、世界的に敵対と断絶が繰り返される今日の状況にあって、共通の志や興味という、考えようによってはごくささやかなきっかけから育ちうる友情の力、しかも芸術と関わるその力について、改めて豊かな事例を蓄積させて、人間の可能性を肯定的に論じ、考える場としたかったからである。ボーウグレーン論文の末尾は、この筆者の気持ちを見事に代弁してくれている。本誌に関わった全ての方に、友情をこめて謝意を表したい。

**註**

(1)キケロー『友情について』(中務哲郎訳)岩波文庫、Kindle版、二〇〇四年、二二頁。(Cicero, *De Amicitia*, 23)

(2)この傾向に関してはさらに検討する必要があるが、チャップマンも同様の見解を述べている。H. Perry Chapman, "Rembrandt, Livens, Dou," *Nederlands Kunsthistorisch Jaarboek*, vol. 70 (2020), p. 253.

＊本特集は、きょうと視覚文化振興財団による視覚文化研究会B(研究員:菊川亜騎、倉持充希、佐藤直樹、宮崎もも)の成果を深谷がとりまとめ、編集にあたった。

9784925185820
1921370023002
ISBN978-4-925185-82-0
C1370 ¥2300E
定価 2,530 円（税込）